

## 女子大生が議員秘書になる — 学びが開いた政治とジェンダーの道 —

植竹恵美香

### はじめに

私は、今年7月から国会議員の秘書として勤務している。大学時代から選択的夫婦別姓導入や、離婚後300日問題解決といった民法改正について取り組んでいたことがきっかけで、国政に携わることになった。新社会人として、議員秘書の業務内容の幅広さと奥深さに悪戦苦闘しながらも、充実した日々を送っている。

大学入学まではジェンダーという言葉さえ知らず、政治に無関心であった。声をあげても社会に何の影響も与えられないと思っていた。しかし、大学でジェンダー学と男女共同参画の講義を受講したことがきっかけで、性別という枠にとらわれず、個人の権利や平等に目を向けることが、平等な社会を構築する一助となると考えるようになった。その後、知識を身につけるだけではなく、実際に声をあげることが大切だと感じ、その声を届ける国会に興味を持って、議員秘書のインターンシップに参加した。加えて民法改正の市民運動に本格的に携わるようになった。この中で、政治への無関心の山積が、生活の不利益や不平等を助長させることを痛感した。また、政治とジェンダーは、女性である私が切り離せない人生のテーマであり、両者は他人事ではなく、自分事であるという考えに行き着いた。そして、ロビー活動を通じて、その中で国会議員と出会い、秘書のオファーを頂いた。

本レポートでは、政治とジェンダーをテーマに、社会問題に対して無関心であった私が、民法改正に興味を持ち、大学での学びや市民活動を経て、議員秘書になるまでの過程において自身の内面的な変化を交えながら、現代における政治とジェンダーについて考える。

## 第1章 学びが開いた政治とジェンダーへの道

### 第1節 私には関係ない

私が中学1年の時、両親が離婚した。離婚後、母は就職活動を始めたが、母子家庭であることがネックとなり、仕事がなかなか決まらなかった。就職をしても、子どもの看病などで仕事を休むと、「子どもを理由に休むなら辞めてもらう」と言われたとショックを受けていた時もあった。また、面接時に「独身の女は結婚したら辞める可能性が高いから雇いたくないが、君は再婚する予定はあるか」と聞かれたと憤慨したこともあった。私が通っていた中学校では、「男は外で働き、女は家庭を守る」という考え方が変化して、女性もキャリアを積める時代になってきたと説明を受けた。しかし、その後で「子育ては母親の方が向いているから、女性がキャリアを捨てて家庭を選ばなければな